

東奥日報

2018年(平成30年)5月31日 木曜日 (14)

防災建築学び深めて

東日本大震災で卒業生犠牲

八工大、遺族寄付で新施設

八戸

八戸市の八戸工業大学は
本年度、同大学で建築を学

び、卒業後に東日本大震災
で犠牲となった男性の遺族
から託された寄付金を活用
し、学生が自由に学びを深



エーカフェを利用する学生たち

めるための空間「A-Case f é」(エーカフェ)を整備した。防災関連の書籍や学生の主体的・能動的な学びを引き出す設備を充実させ、遺族の「建築を学ぶ学生のため、特に防災教育に役立てて」との願いに応える教育活動を展開していく。

男性は同大学建築工学科(当時)を2009年度に卒業し、宮城県石巻市の建設会社に就職。11年3月、津波により帰らぬ人となった。

同大学は12年に500万円の寄付を受け、寄付金運営委員会(委員長・月永洋一教授)を設置。学内の改組改編を経て本年度、開設にこぎつけ、エーカフェの別称や防災関連の書籍約60冊を集めた文庫の名称に、男性の名字を冠した。室内には国内外の建築家の業績や県内の建築を紹介する展示、プロジェクターなどを備え、創造性を育むアート作品も並べた。

利用者の野沢彩乃さん

(同大4年)は寄付について「亡くなられた先輩にどんな恩返しができるか考え、防災を学んでいこうという気持ちを新たにしました」と話した。月永教授は

「貴重な寄付を全て生かして、防災研究の充実やレベルの高い設計デザインの考案といった成果につなげていきたい」と述べた。

(新村菜穂)